

卯月(4月) 神様を山から田に迎える。

卯月という名は、菜の花が咲く頃という意味だという説が一般的。

卯の花は、ユキノシタ科の落葉低木・うつぎの白い花のこと。唱歌「夏は来ぬ」に登場する、初夏を感じさせる花である。

実際の気候は、春の始まりで、「花冷え」というように、花見の頃の夜の空気はまだまだ冷たい。

しかし日本列島を桜前線が北上していく間、桜に続いて多くの花が開き、季節はどんどん夏に向かい、月末はゴールデンウィークに突入。

4月初旬は、花見以外にも、野や山に出かけて神様を迎える古くからの風習がある。

山にいらっしやる神様を歓迎し、田に来ていただき、今年も稲の成長を見守ってくれるように祈ります。

山の神は先祖の御霊だと考える地域もあり、色々なカに守られていることに感謝し、一緒に春爛漫を祝いたい。

上旬 花見の頃

農民たちは、春の農作業に先立ち、満開の桜に豊作を祈ったと伝わっています。

宮中や貴族の邸宅に植えられた桜の下では宴が催され、詩歌も多く詠まれた。

その後、花見は大衆化していく。

【桜餅】

散り際の葉まで有効活用。日本人の“桜愛”が結実したお菓子



江戸風



上方風

江戸風は、クレープのように小麦粉の薄皮で餡を包んだもので、上方風は道明寺粉で作られる餅で餡を包む。

8日 灌仏会

お釈迦様の誕生日に甘茶をかけて祝う。

13日 十三詣り

虚空蔵菩薩を詣で、智慧をいただく

数え年で13歳になる子どもが智慧や福德を授かるために

虚空蔵(こくうざう)菩薩に参拝する行事。

十二支が一巡した後の二回目の年に、大人の仲間入りをするとさうだ。

京都・嵐山の法輪寺の虚空蔵菩薩が有名。



『四月の八日、七月の十五日に設齋(おがみ)す』

という記述が日本書紀、推古天皇十四年(AD 606)の条に書かれているのが日本における灌仏会の最初の記録だそうです。七月十五日というのは盂蘭盆会のことですね。

【私の今月の一冊】



話の内容は、赤字ローカル線の再生についての話で、主人公は新社長に就任したのは新幹線のカリスマ販売員(またあなたから買いたい斎藤和泉さんをイメージ)と県からの出向している副社長とでやる気のない他の社員を巻き込みつつ街おこしを含めて物語が展開していく。新社長が次々にアイデアを出してくるのですが、それが次々に当たり(実際こんなにうまくいくことはないと思うが)再生の道をたどっていくというストーリーです。

非常に読みやすく、くすんだ心に爽快感を与えてくれました。

単純に面白い作品でした。

よく似た作品に阿川大樹さんの「D列車で行こう」 榎周平さんの「プラチナタウン」などがあります。

講談社 ¥1,575

【福山のお城の数】

皆さん知ってましたか。福山にお城が87城もあることを!!

そのうち国の史跡が3城、県の史跡が1城、市の史跡が4城あります。

国の史跡の一つは、福山城です。これは誰でも知っていると思いますが、残りの2城はどこでしょう。

① 桜山城

備後国一宮吉備津神社の南の丘陵に築かれている。桜山城は中小興寺の北にある山頂を中心に山全体に広がっているが大半は、墓地や雑木林になっている。主郭のある山頂は草が刈られ桜が植えられている。主郭には、櫓台が残っている。

② 鳶尾城

吉備津神社の西の山に築かれていた。

明瞭な遺構は残っていない。桜山城と同じ「一宮(桜山慈俊拳兵伝説地)」